

『古事記雜考』訓例の根拠——万葉・書紀・仮名書古事記——

The Basis of “Kunrei” in “Kojikizakko”

千葉真也

本居宣長全集第十四巻に「古事記雜考」（以下「雜考」と略す）と称する稿本が収められている。この書名は宣長自身によるものだが、内容は決して雜然としたものではない。地名、姓氏、文法、字法、訓例、題号、日本紀ノ論、修撰、古事記上巻并序、凡例、道テフ物ノ論と、その内容を示す小見出しを書き写してみるならば、この「雜考」が既に十分、古事記伝一之巻、二之巻を予想させるものとなっていること、全集十四巻解題の言葉を借りると「古事記伝総論の骨格をなすもの」となっていることを知りうる。私は「雜考」の訓例の部を中心にいくらかの検討をくわえ、宣長の古事記訓読の方法の一端を明らかにするとともに、賀茂真淵の古事記研究との関わりについて多少の推測をこころみたいと思う。

一

「雜考」訓例の部の初め三分の一ほど、全集で言うところ二四頁から三五頁までは訓読の方法論にあてられる。宣長において訓読の眼目は、現に漢文の形で存在する古事記を、その本来の形として想定される純粋な古語に還元するところにある。そのとき資料とすることができるのは、第一に「古書ノ中ニ、古語ノママニノセタル所」「続紀ナドノ宣命」「延喜式ノ八ノ巻ナル祝辞」「此記ト書紀トニ載タル歌」のごとき「辞ノツツキサマ、スベテ此方ノ語ノママ」であるもの、さらに古語を「アマネク」おさめている万葉集、「此記ニモレタル古語ノ、カノ訓ニコレル」ことの多い日本書紀などである。これは後に古事記伝一之巻の訓法の部に言うところと、ほぼ同様であるが、続く三分の二ほど、全集で言うところ四七頁まで「記中ニツネニ用ナル字ノ訓例」が列挙されているのも、記伝で「助字のたぐひ、又其余ホカも、常に出る字ども」と

して多くの文字の訓例が列挙されるのに対応する。

私はまず「記中ニツネニ用キタル字ノ訓例」（記伝で言う通り、漢文の助字が大半である）が、どのような根拠によるものであるか、宣長が資料として挙げたものが、実際どのようなように使われているか、確認するところから始めよう。といっても助字の訓という事柄の性質から万葉集と日本書紀の使われ方を見ることになる。宣命と祝詞は、いわゆる宣命書の形式をとっているので、漢文の助字の訓の決定に寄与するところは大きくないと予想されるし、

「古書ノ中ニ、古語ノママニノセタル所」も同様である。また宣長以前の古事記の刊本すなわち寛永本と延佳本も考察の対象から除く。どちらに対しても宣長はきわめて低い評価しか与えておらず、したがって、表立ってそれを用いることはありそうにないからである。要するに、宣長が述べているところに従ってみてどの程度まで宣長の訓を再現できるか、考えてみようということである。以下、いくつかの助字とそれに対する訓、その根拠となつていると考えられる万葉集と日本書紀の用例を示す。万葉集は寛永版本、日本書紀は寛文版本、ともに当時最も普通に用いられたものによっているが、記伝をはじめとする宣長の著述に引用されるのも、おおむねこれらのテキストであることは容易に確認できるはずである。また日本書紀の訓は「此記ニモレタル古語ノ、カノ訓ニノコレルモ多ケレハ、ソノ中ニ、古キト後ナルトヲエラヒテ取ルヘキ事モアル」もの（『雑考』、宣長全集一四卷三五頁）、万

葉集は「てにをはの訓には、大かた誤りすくなし」（『詞の玉緒』、宣長全集五卷二六三頁）とされるもの、すなわち助字の訓の根拠となしうるものである。いずれも、助字とそれに対する「雑考」の訓、万葉集、日本書紀の順に並べた。万葉集は「万」と略し、巻数と国歌大観番号（旧）を漢数字で示す。日本書紀は神代巻については巻名と段名、それ以外のものは巻名と年時を示した。「前」「後」は国史大系本の前篇、後篇の意味である。最後の漢数字は同じく国史大系本の頁数である。

乃 スナハチ 乃^チ以^テ天瓊矛^{アマノトコヨ}（神代上・大八洲生成 前^一七）

即 スナハチ 即^チ对馬嶋^{オモツシマ}（神代上・大八洲生成・前^一六）
之^ニノ 御執^{ミツクシ}乃^ミ梓弓^{シラユミ}之^ニ（万^一・一^一三） 天地之中^{ツクリノナカ}生^ナニ

一^{ヒト}物^{モノ}（神代上・神代七代・前^一二）

於^ニニ 劍^{ツルギ}乃^キ於身^{ミミ}副不寐者^{ミソメナシ}（万^一・二^一・一^一九四） 一物^{ヒツモノ}在^ナニ於^ニ於^ニ

虚^{ソラ}中^{カニ}（神代上・神代七代 前^一二）

者^ハハ 虚見^{ソラミツ}津山跡^{ツヤマノアト}乃^ハ国者^{クニノミヤコ}（万^一・一^一二） 月読尊^{ツキヨミミコ}者^ハ可^シ以^テ

治^チ一^{ヒト}滄海原潮^{ソウカイハラナミ}之^ノ八百重^{ヤフヤサ}也^{ナリ}（神代上・四神出生 前^一一八）

而^ハテ 玉刻^{タマキ}春内^{ハルウチノ}乃^ハ大野爾馬数而^{オホノニウマナメチ}（万^一・一^一四） 冥滓^{ミヅリ}而^{ナリ}

含^フレ^レ牙^{キザシラ}（神代上・前^一二）

耳^{ミミ}ノミ 如此^{カク}耳^{ミミ}故爾長等思伎^{コノミミヨナカトオモヒキ}（万^一・二^一・一^一五七）

只為暫來耳（神代上・瑞珠盟約 前一二七）
 以モチテ 夕衢占問石ト以而（万・三一四二〇）
 テ 玉蟠石垣淵之隱庭伏以死汝名羽不謂（万・十一一・二七〇〇） 下枝懸ニ以粟国忌部遠祖天日鷲所
 作木綿（神代上・宝鏡開始 前一二七）
 故ユエニ 日月之数多成塗其故皇子之宮人行方不知毛（万・二一六六七） 悲汝故来（神代上・四神出生・前一二二）
 是カレ 故天先成而地後定（神代上・神代七代 前一二）
 コノ 是山黄葉下花矣我小端見反恋（万・七一三〇六） 是行也陽神先唱曰（神代上・大八洲生成・前一二五）
 コレ 是謂ニ神世七代者矣（神代上・神代七代・前四）
 ココニ 是獲ニ滄溟（神代上・神代七代・前四）
 為オモフ・オボス 生男為ニ赤心（神代上・瑞珠盟約・前一二九）
 勿ズ 吾勿ニ貪ニ天下（神功元年三月・前一二五三）
 雖トモ 吉咲ハ師浦者雖無（万・二一一三八） 頃者人雖多請（神代上・宝鏡開始・前一二七）
 ドモ 大宮者此間等雖聞（万・一一二九）
 マタ 昔人ニ亦母相目ハ毛（万・一一三一）
 モ 於レ母亦兄、於レ吾亦兄（仁賢六年九月 前一二四一五）

可ベシ 可飲有良師（万・三三三三八）
 欲オモフ・オボス 吾欲ニ從ニ母於根国（神代上・四神出生・前一一八） 伊弉諾尊欲見其妹（神代上・四神出生・前一二〇）
 将ン 妹之門將見（万・二一一三一） 經津主神是將佳也（神代下・天孫降臨 前一二六二）
 且マタ 和礼乎於吉弓且比等波安良自（万・十八四〇九四） 且常以ニ哭泣ニ為行（神代上・四神出生・前一一〇）
 由ヨシ 無由脱免（神代上・宝劍出現・前四〇）
 相ユエ 常不レ言何由矣（垂仁二三年九月・前一一八三） 耳梨与相諍競伎（万・一一一三） 二神相謂曰（神代上・大八洲生成・前一一八）
 其ソノ 馬數而朝布麻須等六其草深野（万・一一四） 神聖生ニ其中ニ焉（神代上・神代七代・前一二）
 彼カノ 其甕速日神（神代上・四神出生・前一一四） ソノ 彼浪乃伊夜敷布二（万・一三三二四三） 彼五男神 悉是吾兒（神代上・瑞珠盟約・前一二六）
 カノ 其彼母毛吾乎將待曾（万・三三三七） 彼神之象（神代上・宝鏡開始・前一二四）

哉ヤ 情有南畝可苦佐布倍思哉（万・一・一八） 使_レ人_ヲ

有身者哉（神代下・天孫降臨・前・七九）

乎ヤ 如何婦人反先言乎（神代上・大八洲生成・前

一五）

カ 婦人之辞其已先揚乎（神代上・大八洲生成・前・七）

矣ヲ 三津崎波矣恐（万・三・二四九）

至マデ 黒髪二白髪交至者（万・四・五六三）

到イタル 不念丹到者妹之飲三跡（万・一・二五四六）

ユク 汝二人到天香山（神武即位前戊午年九月・前

一・二二）

竟ヲハリテ 丈六仏像並造竟（推古一四年四月・後一

四六）

訖ヲハリテ 言訖忽然不見（神代上・四神出生・前

一・二〇）

以上は「雜考」に挙げられた助字の訓の中で万葉集と日本書紀の、当時もつともありふれたテキストに根拠を求めうるもの、すなわち宣長の言葉通りの資料によって訓を獲得しうるものである。これは古事記伝一之巻の訓法の部にほとんどそのまま継承され、「平安初期の訓点本の訓法と一致する」と評価されることとなる。

① だが、宣長の訓のすべてが万葉集や日本書紀の訓によってうら

づけられているわけではない。もともと万葉集は歌の集であり、散文の語彙を漏れなく含んでいるわけではない。日本書紀はその点で——散文であるという一点で——万葉集にない利点を持っているけれども、格の正しい漢文で書かれているので、純然たる古語を求めようとする宣長にとってはそのまま利用することのむずかしいところもある。そのとき、訓読しようとする対象の古事記そのものを根拠としなくてはならない事態も生じてくるのであって、そのような例を我々は爾や及の訓に見ることができる。この二つの文字の訓について宣長自身が述べるところを、「雜考」と同趣で、より整備されている記伝から引いてみることにしよう。

抑此記の文法、すべて一連の語終りて、次の語の首には、かならず於是とも、故とも、爾ともいへる、此三の辞を用ひたるさまを考へ合するに、たゞ其処の語の勢に随ひ、調に任せて置るのみにして、必しも各異なる意のあるにはあらず、さればまた故爾とも、故於是とも、重ねても置る、其も同じことなり、但し右の三のうち、爾字は、於是とある処と同じ勢なる処に多く、また故爾と重ねたるは多くあれども、爾於是と重ねたる処は無し、これらを思へば、みな許々爾と訓べくして、迦礼とは訓まじきが如し。

② 十分に明瞭な文章であるが、屋上屋を重ねて私なりに言い直してみよう。まず、故、於是、爾の三つの文字は「其処の語の勢に随ひ、調に任せて置るのみ」で、ことなる意味を持っているわけ

ではない。故はカレ、於是はココニと訓まれるので、爾の訓もカレかココニかのいずれかであろうと考えられる。故爾と重ねて用いた例が多くある（二八箇所を数える）ので、爾はカレとは考えられない。すなわちココニという訓が考えられる。さらに爾がカレであるとする、故於是（カレココニ）が（二例）あるように爾於是という形もあつてしかるべきであるが、それは一例も無い。したがって爾がカレと訓まれる可能性は乏しい。おそらくこのような筋道で爾〓ココニと考えるに至ったのであろう。最近の訓読では爾をココニと訓むことをしないが、宣長の議論の筋は分りやすい。同じような議論が及についても行われている。その結果として得られたマタという訓は、爾（ココニ）よりも寿命が長く、現在でも行われている。こちらは記伝の記述を引用するだけにしておく。

抑麻多と訓べき所由は、天若日子之父天津国玉神及其妻子（傍点千葉、以下同じ）とありて、又次には、天若日子之父亦其妻とある、及字と亦字と、用ひざま全同じ、また八尺勾璫鏡及草那藝、劍亦常世、恩金神、また国造亦和氣及稻置など、一連の内に、及と亦とを重ねても云る、只同じ用ひざまなるを以て知べし。

二

「雑考」における助字の訓はかなりの部分が万葉集と日本書紀

の刊本の訓により、いく分かは古事記の表現そのものを根拠とする。これが今のところ私の確認しえたところである。宣長の示した手だてによって、彼の到達した結果に我々も到達しようということでもある。だが、それですべてが尽くされるわけではない。もう一つ、宣長自身が記伝の中で始終言及する賀茂真淵の古事記研究をも我々は勘定に入れておかねばならない。

乃、即、及、各などに対する訓がその例である。まず「雑考」の記述を確認しておこう。

〔乃〕此字ハスナハチト訓ムヘシ、又ヤガテト訓テモヨキ処アリ。

〔即〕コレモ乃ト同シ心ニ用ヒタリ。

〔及〕某及某トアル及字、漢文ノ格ニテ多く用キタレド、コレヲヨビトヨミテハ、全ク此方ノ語ニアラズ、此字ヲ訓ムニサマノ異アリ、意ハミナ同シ事ナレドモ、ソコノ語ノ勢ニヨリテ訓カハルヘシ、マタト訓ムヘキ処アリ、トトヨムヘキ処アリ、ハタトモヨムベキアリ、下ヨリ返テモトモヨムベキアリ、捨テヨムマジキモアリ、ナホソノ処々ニ云ベシ、サレドイツレモマタト訓メハタガフ事ナシ。

〔各〕コレモ用キザマ、漢文メケル処多シ、ミナト訓テヨキ処モアリ、カタミ。ニトヨミテヨキモアリ、又オノノニテカナヘル処モアリ、コレヲ統紀ニ【廿六ノ十一ヲ】於乃毛々々々トアリ、古語也。

乃と即に対するヤガテ、及に対するトとモ、各に対するカタミ二などの訓は、万葉集や日本書紀の刊本には例が無く、古事記の二種の刊本にも見出すことはできない。それが真淵による古事記訓読、具体的には多和文庫所蔵の真淵書入本古事記（以下「書入本」と略す）や本居宣長記念館に宣長の手になる写本が残されていて、確実に宣長が参照したと言いうる、いわゆる仮名書古事記の中には、かなりの数の用例が存在する。

真淵の古事記研究は、宣長における古事記伝のような形でまとめられることがなかったためか、あまり注目されていない。そのうえ、「よのかぎりもはら万葉にちからをつくされしほどに、古事記書紀にいたりては、そのかむかへ、いまだあまねく深くはゆきわたらず、くはしからぬ事どももおほし、」（玉勝間・二・「おのれあがたるの大人の教をうけしやう」という言葉が宣長が残していることもあつてであろう、宣長に対する影響すら、さして重視されているようでもない。だが「主と古語を委曲に考へて、訓を重くすべき」書物で古事記があるならば、「先本文をよく訓候て後、意は考有べき事」（明和四年十一月十八日付けの宣長宛書簡）という認識のもと、訓読に努力を傾注した真淵の営為の意味は決して軽視されるべきではない。さらに後述するように「雑考」は真淵の研究成果を参照した可能性が高く、さしあたって問題としているいくつかの助字の訓も真淵によったと考えるのが最も妥当であるとすれば、「古事記伝総論の骨髄」に真淵の寄与を

考えるべきこととなる。

当面の問題にもどらう。真淵が乃や即や及や各をどのように訓んだか、確認しておこう。宣長の訓も記伝によって、できるだけ比較の対象とする。

乃は古事記上巻で二二箇所、中巻で一六箇所、下巻で一三箇所の総計五一箇所で使用されている。上巻の訓読を記した仮名書古事記は三箇所をやがて、一一箇所をすなはち、そのときが一箇所、そのほかは訓読しない。書入本は全体で五箇所をやガテ、スナハチとするのが十箇所、ほかは訓を示さない。宣長は大半をスナハチと訓み、ヤガテとするのは記伝全体で一箇所にすぎない。記伝の方の訓法の部では乃をスナハチとしか訓んでいないのが思いおこされるところである。ほかにカクテ、カレ、カクシテなどが一箇所ずつである。記伝でただ一箇所ヤガテとなつてるところが仮名書古事記の方でもそうなつていたので、書入本をもあわせて三種を掲出しよう。記伝はカッコ内に刊本の巻数と丁数をはじめに、次に宣長全集の巻数と頁数を示した。仮名書古事記（仮）と、書入本（書）についてはやはりカッコ内に真淵全集の巻数と頁数を示している。

故遣天菩比神者。乃媚附大国主神。（記伝一三ノ二

一〇一四一）

故遣天菩比神者、乃媚附大国主神、（書二

六七七）

故天のほひの神をつかはし給へば、やがて大国主の神におも
ねりつきて、(仮 一七一〇二)

書入本で乃の右傍につけられた白丸は訓読しないことをあらわす
符号、したがって仮名書古事記からやがてを除くと書入本の訓に
なる。

真淵が乃をやガテと訓むのはここだけではないが、すべて挙げ
ていては紙面を浪費する。用例の数を示すことを主眼とし、実例
は一箇所だけを掲げるにとどめる。即、及、各の場合も同様であ
る。

助字としての即は古事記全体では一二九箇所で使用されている。
内訳は序文四、上巻三四、中巻六一、下巻三〇である。宣長は上
巻で四箇所、即をやガテと訓むが、ほかは中巻で一箇所をやガテ
とするにすぎない。大半はスナハチと訓読され、カレ、カクテ、
カレココニなどの訓が時に見出される。これに対して真淵は書入
本で一九箇所(上巻二一、中巻四、下巻四)、仮名書古事記で五
箇所、即に対してやガテという訓を付している。そのほかはスナ
ハチとも訓まれるが、書入本では訓を示さぬところが、先の乃同
様に多い。次の例では記伝も真淵の二種の訓もすべて即をやガテ
と訓んでいるが、三者が一致するのはこれぐらいであって、記伝
でやガテとなっているところを真淵はスナハチと訓む例もある。

即遣^{イガテ}予母都志許売^{ヨモツシコメヲウヘ}令追^{メキ}。(記伝六ノ一六 九一二四七)
即遣^{イガテ}予母都志許売^{ヨモツシコメヲウヘ}令追^{メキ}。(書 二六一二三)

やがてよもつしこめをつかはしておはせ給ふ、(仮 一七一
七八)

及は古事記全体では三八箇所で使用される。内訳は序文二、上
巻十、中巻一九、下巻七である。宣長は上巻の二箇所をモ、中巻
の二箇所をト、一箇所をモと訓む。それ以外にはマタが二箇所、
マデが二箇所、訓読しないところもある。真淵の書入本上巻では
トまたはトトモニが五箇所、モが二箇所、マデが二箇所、ラ(複
数をあらわす接尾語)が一箇所となっている。仮名書古事記もま
ったく同じに、とまたはとにも、が五箇所、もが二箇所、ま、が
二箇所、らが二箇所あって、書入本、仮名書古事記とも十箇所は
どの用例に対して多様な訓を与えている。書入本の中巻と下巻は
トが過半を占め(中巻一五、下巻三三)、そのほかはマデが五箇所
あるのが目立つ程度である。序文については宣長は漢文訓読風の
オヨビという訓をつけており、彼の序に対する意識をうかがわせ
る。例によってトとモとの実例を一箇所ずつ示すが、記伝におけ
るトの例は上巻に相当する部分には存在しないので、ここでは仮
名書古事記の例は欠くこととなる。まずトの例。

亦著^{マタハシトヒラヂサハニツクリテ}及比羅伝多作^{ハシトヒラヂサハニツクリテ}。(記伝三〇ノ四六 一一一三六八)
亦著^{ハシトヒラヂサハニツクリテ}及比羅伝多作^{ハシトヒラヂサハニツクリテ}。(書 二六一一八〇)

次にモの例。

高天原^{タカマノハ}及葦原中国^{アシハラナカツクニ}自得^{オツカラテリアカリキ}照明^{ミホリ}。(記伝八ノ六二 九一三
七八)

ソノイロセホデリノミコトニ
謂其兄火照命。各相易佐知欲用。
カタミニサチヲカヘデモチヒテムトイヒデ
(記伝一七ノ一)

○—一二五)

謂^{ノタマヒデ}其^ノ兄^ノ火^ニ照^ニ命^{サチ}各^{カヘシテモタラント}相^上易^上佐^上知^上用^上、（書 二六―九

$$\frac{1}{2}$$

其いろせほのてりの命にかたみにさちがへしてもたらんと

高天原及葦原 中国自得照明、
(書 二六―四二)

高天原あし原の中つ国もおのつからかどやきき、(仮 一七
一八七)

たまひて（仮 一七—一二三）

三

乃と即に対するヤガテ、及に対するト、モ、各に対するカタミ二などの訓が既に真淵の古事記訓読の中に存在することは、一応確認することができた。しかし、一つ問題がある。宣長が真淵による古事記研究の成果を借覧しえたのは明和五年三月以後と推定されている。もう少し詳しく言うとはじめに上巻の訓読だけを記したものの、すなわち「その上つ巻をば、考へ給へる古言をもて、仮字がきにし給へる」と玉勝間二の巻「おのれあがたるの大人の教をうけしやう」に述べたものを借り受け、ついで同じく玉勝間で「中巻下巻は、かたはらの訓を改め、所々書入^キなどをも、手づからし給へる本」と述べたものを借り得ている。上巻の訓読だけを記した本は宣長自身によって筆写され、その宣長筆写本が本居宣長記念館に収められている。真淵の全集に仮名書古事記というタイトルで収録され、「古事記上巻真淵訓」、「仮名古事記」、「古事記神代」などの名称でも知られているのがそれである。一方、中巻と下巻の書入本については「今それと確認されるものは見出されていない」（真淵全集一七卷一三〇頁 仮名書古事記解説）状態であり、記伝に「師説」として引用するところから内容を推測するほかはない。大体は、多和文庫所蔵の、寛永版本への

書入本すなわち本稿で書入本として引用したものと一致しているが、見すごすことのできない差異もある。⁹⁰⁾結局は「師説」によるのが最も確実だということになるが、今は宣長の借覧した書入本の性格などに深く立ち入る準備もない。ともかく、おおむねかくのごときものである仮名書古事記と書入本とを借覧したのは、明和五年の三月以降というのが通説である。

ところが、「雑考」は明和四年ごろまでに脱稿していたというのが、やはり通説である。つまり現在の通説に従うならば、「雑考」は真淵の古事記研究とは殆んど無関係に成立したということになり、——すくなくともまとまった形で真淵の研究成果を参照することなしに成立したということになり——、本稿で問題としているいくつかの助字の訓、乃と即をヤガテ、及をト・モ、各をカタミニとすることきものを真淵と宣長は互いに無関係に案出したということになる。反対に、「雑考」と仮名書古事記等の関係を認めるならば先に示した二つの通説のいずれかを否定しなければならぬ。

真淵から仮名書古事記などを借覧しえた年時に関して私は考える材料を持ち合せていないので、さしあたって通説にしたがっているのだが、「雑考」の成立を明和四年以前とする通説については、その根拠、きわめて薄弱と考えている。「雑考」を収める宣長全集第十四巻の解題は二頁半にわたってその成立時期を考証するが、実質的には「定家仮名遣の慣習の跡を全体にわたってとど

めている」一点が「本書が既に明和四年ごろには脱稿していた」（全集一四巻一頁）とする根拠となっている。⁹¹⁾宣長の歌稿である「石上稿」は「明和四年（一七六七）までは、古風の歌以外は長年親しんできた定家仮名遣の慣習に拠っていたが、同五年にはほぼ確実に歴史的仮名遣に改まっている」（全集十五巻二七頁）ことが知られている。そこから全集の解題者である大久保正氏は「明和五年（一七六八）以後は、ほぼ確実に定家仮名遣の旧習を脱していたと考えられるので、本書は、その仮名遣の混用の程度から推すと、明和四年までには、既に加筆訂正の部分を含めて脱稿していたものと考えなければならない」（全集一四巻一〇頁）とするのである。だが、一方で明和五年戊子三月と、やはり大久保氏が推定する「文選五マテ読了ル、子ノ三月廿七日」という日付を有する宣長の随筆第一巻「松乃落葉」は、「定家仮名遣の慣用を残している」（全集一三巻一四頁）ことがみとめられる。「三月廿七日」の日付に終る文選からの摘記の直前、全集の付した番号で「八一」に「ソノユ、ハ」（傍点千葉）などという仮名遣のあるのを見るならば、むしろ明和五年の三月ごろまでは「長年親しんできた定家仮名遣の慣習に拠っていた」ことが言えるのである。定家仮名遣の跡をとどめていることをもって「雑考」が明和四年までに成立した論拠とするのはきわめて危険であると言わなければならない。

だが今の私にとって「雑考」の成立や、真淵からの資料借覧の、

年時そのものは直接の問題ではない。「雑考」が仮名書古事記等と関係があるかどうか、これが私の問題である。常識的に考えて宣長と真淵が独立して万葉集や日本書紀に例のない訓を五つ、同じように案出するということはありそうもないが、もうすこし、その推定の傍証となりそうな事柄をつくわえる。

「雑考」の中には何箇所か古事記の本文を引用する。その中に先行する刊本である寛永本や延佳本とは一致せず、仮名書古事記あるいは書入本と一致するところが存在する。以下、四例ばかり記の本文を記伝によって掲げ、寛永本(寛)、延佳本(延)、書入本(書)、仮名書古事記(仮)、「雑考」(雑)の対応する部分を示す。記伝については、巻数と丁数をはじめに、次に宣長全集の巻数と頁数をカッコ内に示す。寛永本と延佳本は諸本集成古事記の巻名と頁数をカッコ内に示す。書入本と仮名書古事記については真淵全集の巻数と頁数を、「雑考」は宣長全集における巻数と頁数を、それぞれカッコ内に示す。

アガウメリンシミコ
吾所生之子(四一三七 九一八〇)

アカノ
吾所生之子(寛 上六八)

アガウメリンシミコ
吾所生之子(延 上六八)

アガウメリンシミコ
吾所生之子(書 二六一一三)

アガウメリンシミコ
あかうめる子は(仮 一七七一三)

アガウメリンシミコ
吾所生之子、(雑 一四一三六)

ナリマセルカミナリ
所成之神者也。(六一五五 九一二七二)

ナリマセルカミナリ
所成神之者也(寛 上二六六)

ナリマセルカミナリ
所成神之神者也。(延 上二六六)

ナリマセルカミナリ
所成神之神者也。(書 二六二二八)

ナリマセルカミナリ
なれる神也、(仮 一七七八〇)

ナリマセルカミナリ
所成神之神者也、(雑 一四一三六)

コロサントスルトキ
将殺時。(一四一二 一〇一〇三)

コロサントスルトキ
将殺時(寛 上五〇三)

コロサントスルトキ
将殺時。(延 上五〇三)

コロサントスルトキ
将殺時、(書 二六二七九)

コロサントスルトキ
ころさんとする時、(仮 一七一〇六)

コロサントスルトキ
将殺時、(雑 一四一四一)

マセメムトシ
将為待攻而(一九一二 一〇一三六七)

マセメムトシ
将為待攻而(寛 中四四)

マセメムトシ
将為待攻而(延 中四四)

マセメムトシ
将為待攻而(書 二六一一二)

マセメムトシ
将為待攻而、(雑 一四一四〇)

もちろん、これらのものも真淵なくしてありえないというものではない。宣長と真淵とが同じ筋道で考えたとするお互いに無関係に同じように訓むことはありうる。私の見出し得たものは零細な断片にすぎない。二人の訓が酷似しているとしても私の推論は確

からしさの域にとどまらざるをえない。最後にもう一つ、これも私には無関係とは思えぬ二つの文章を引くことにしよう。

序は恐らくは奈良朝の人之追て書し物かとおほゆ、序中にみことゝいふに尊の字有、尊は至貴をいふと日本紀にしろし、古事記は皆命字のみ也、(中略) 凡日本紀も推古天皇紀以下は文体まち／＼也、事実の相違も有之は、是も推古以後は奈良朝にて加へしものと見ゆ、其比古事記の序も作りしか、これらの事、後來よく考給へ、(校本加茂真淵全集思想篇 下一三四四頁)

明和五年三月十三日付と考証されている、賀茂真淵から宣長にあてた書簡の一節、引用部に先立って「副島長民といふ人、其訓をのみ記置候」古事記、すなわち仮名書古事記を宣長のもとへ「此度遣候」むねが記されている。もう一つは、「雑考」の二、古事記序文の注、「日子波限建鵜草葺不合尊」という表記に関して述べた部分である。

美許登二尊、字ヲ書事、書紀二至尊、曰尊云々ト註アレハ、カノ撰者ノ始テカキ出サレタリト思シキニ、コムニモ書ルハ、ソノコロハヤク世ニカキアヘル事カ、ナホ疑ハシ、(中略) 尊、字ニ目ナレタル後人ノフト書誤レルカ、ハタサカシラニ改メタルニテモアリナン、サレト今ハ諸本トモニ尊トアリ、コノ字ニヨリテ、此序ヲスヘテ後人ノ偽作カト云フ人アレト、ヨク味ヒミルニ、安万侶ノミツカラカケル序ニウタカ

ヒナシ、(全集一四一八五)

「コノ字ニヨリテ、此序ヲスヘテ後人ノ偽作カト云フ人」とは「序は恐らくは奈良朝の人之追て書し物かとおほゆ」と宣長に述べた真淵のことと考えるべきではあるまいか。宣長の古事記研究を助字の訓という管を通してのぞいてみたところ、古事記の本文を熟視し、万葉集や日本書紀の訓に充分な配慮を怠らず、先達たる真淵の成果を消化しようとするところから古事記研究に着手した宣長の姿が見えたという、まったく平凡な結論に達したのが今回の私の報告である。

注

- (1) 宣長全集九、五二二頁～五二三頁(古事記伝補注)。
- (2) 宣長全集九、四一頁。
- (3) 宣長全集九、四四頁。
- (4) 宣長全集一四、三五頁。
- (5) 注(4)に同じ。
- (6) 宣長全集一四、四〇頁。
- (7) 宣長全集一四、四五頁。
- (8) 宣長全集九、三一頁。
- (9) 真淵全集一七、一二三頁～一二五頁(仮名書古事記解説)。
- (10) 記伝一八巻以後、すなわち古事記の中巻と下巻に相当する部分に引かれた「師説」は、真淵から借覧した書入本によるところが多

いと考えられる。本文に述べたごとく、それは多和文庫所蔵の寛永版本への書入本と、かなり似たものであったと思われる。ただ、古事記寛永本には中巻の崇神天皇のくだりで一箇所、大量の脱文がある。(諸本集成古事記で中巻の二二頁から二四二頁まで。古典文学大系「古事記 祝詞」で一八〇頁八行目から一八四頁三行目まで。記伝では二三ノ四二から二三ノ七〇あたりまで。) 真淵もそのことに気づいていて当核箇所(真淵全集二六、一三八頁)に「此間教行脱」という書き込みをしている。ところが記伝のその部分に「三箇所ほど節説に対する言及がみられる。つまり宣長の借覧した本は、寛永本への書入本ではなかった可能性が大きいということになる。

(11) 大久保氏の論拠はそれ以外に古事記伝の起稿を明和元年とするところにあるらしいが(氏の議論は古事記伝の起稿と古事記研究への着手を混同しているようなおもむきがあって、はなはだ分りにくい)、この明和元年起稿説をはじめとする記伝成立に関する通説がきわめて疑わしいことは既に岩田隆氏によって指摘されている。(鈴屋学会報第六号所収 『古事記伝』の起稿と稿本に関する一臆説)

宣長の著作については筑摩書房版の本居宣長全集に、真淵の著作については続群書類従完成会版の賀茂真淵全集によるのを原則とした。「雑考」は全集の凡例に従って、宣長により加筆訂正をほどこされた形で示した。なお本稿の骨子は平成元年の近世文学会春季大会で「記伝訓法の根拠」として発表したものである。